

世界新、日本新が生まれた 関東マスターズ選手権

秋めく長月。仲秋の名月が夜空に浮かぶ季節でもある。だが、くつろいで月見をする余裕が生まれればいいが、いまだにコロナ禍がくすぶっている。例年、9月に開催が多かった全日本マスターズ陸上競技選手権も中止され、ここ3年間、マスターズ競技者は手持ちぶさただろう。一方、各地域では大会を開くところもあり、8月7日には関東マスターズの第31回大会が千葉県で行われ、世界新1、日本新6が生まれた。記録樹立者のうち、ベテランズ(高齢者アスリート)の方取材した。

W90・200mで53秒35の世界新
快挙の齋藤恵美子さん(91歳・東京)

91歳の齋藤恵美子さんが、またも快挙をやったのけた。第31回関東マスターズのW90クラス的女子200mで53秒35(−0.2)で走り、55秒62の世界記録を9年ぶりに破ったのだ。

従来の世界記録は2013年に守田満さん(熊本/当時・90歳)が出したもので、日本人女性が続けて世界記録をつくったことになる。

齋藤さんは8月号で紹介したように、6月に大阪であった日本選手権のマスターズの部・100m(W65～90)で22秒76(+0.4)で走り、場内アナウンスで「世界新です」と放送された実力者。だが、日本選手権の1年前の埼玉マスターズで21秒25(+1.1)を出しており、既に齋藤さんは23秒15の世界記録を書き替えていたのだ。

関東マスターズでの齋藤さんは世界新をマークしたものの「風はよかった

のに、もう少し良い記録を出したかった」と、やや残念そう。聞けば「この日は体調が万全でない上、雨が降ってレースの時間がずれるなど、調整が難しかった」と齋藤さん。

100mは本来11時20分開始だったが、午後1時近くにずれた。また、200mは午後4時15分が同5時30分頃までにはずれて行われたそう。では、100mの方はといえば「まったくダメでした。23秒ぐらいでベストとはかなり遠いです」と話す。

それにしても大したもの。これで齋藤さんが出した記録は、世界マスターズでは実施されていない60m・W85の11秒67とW90の12秒76(+0.5)という日本記録をはじめ、100m・W85での19秒37(+0.5)、W90の21秒25(+1.1)、200m・W85の41秒58、今回のW90で53秒35、400m・W85の1分41秒63と盛りだくさんだ。

以上はすべてW90・200mの新記録を除いて公認日本記録。このうち100mのW85、90、200mでW85、90、400mはW85と数々のクラスで世界記録を打ち立てた。

今回の関東マスターズでの200m53秒35のタイムには納得はしていないが、MVPを射止めて「大変うれしかった」と上機嫌だった。「これまで80歳代から走ってきてよかった。足の調子がよくなったら、W85で止まっている400mにも」と意欲をみせている。また、「走るたびに思いますが、陸上はシビアなスポーツですね。天候や自

分自身の体調ほか、すべてが万全でなければいけない」と、“陸上の奥義”を体得した様子。さすがは卒寿(90歳)を越えた人だ。

8月号で触れたように9月中旬に兵庫県芦屋市であるベテランズのテニス大会には出場予定だ。現在、齋藤さんは8連勝中。今年もマスターズ陸上と同様、テニスでも楽しんでほしい。

競歩の松本初枝さん(80歳・千葉)
日本新をW80・3000mWでマーク

W80・3000mWで松本初枝さんが22分42秒00の日本新記録を出した。旧日本記録は25分18秒63で大幅な記録更新だ。競い合った出場者は32人だった。

松本さんも気象条件には「参りました」と、「暑い上に降り出した雨で、競技が遅れて始まったり。調整が難しかった」ようだ。体調の方は「良くもなく、悪くもなく」といつもどおりだったそう。

競歩はもともと得意で3000mWのW70クラスでは18分41秒55(2014年)、W75クラスで19分23秒50(17年)と、5000mWのW70クラスで31分37秒13の日本記録を持っている。今回、新しく3000mのW80クラスに名前を加えた。

競歩に興味を持ったのは58年前。まだ20代の頃に、テレビで1964年の東京五輪の競歩を観戦してからだ。「走る方はただ走るだけで単調だけど、競歩は“歩型”が大切。単に歩いている



6月の日本選手権でW90・1000mで世界新記録を出した齋藤恵美子さんは、関東マスターズのW90・200mでも世界新を更新した。写真は別大会のもの

第31回関東マスターズ日本記録樹立者

種目	クラス	順位	記録	風	選手名	年齢・登録県
200m	W90	優勝	53秒35◎	-0.2	齋藤恵美子	(91歳・東京)
200m	M25	優勝	21秒62	-0.6	ビリヤバニア・ダニエル	(27歳・千葉)
3000mW	W80	優勝	22分42秒00		松本 初枝	(80歳・千葉)
重量投	W25	優勝	10m83		富澤 美香	(28歳・千葉)
重量投	M30	優勝	13m83		角田 光洋	(31歳・東京)
重量投/ハンマー投	M90	優勝	8m55/20m95		高野 孝雄	(91歳・栃木)

※◎は世界新記録、年齢は大会当時



全日本マスターズで投てき3種目入賞の実績を持つ高野孝雄さんが、関東マスターズにM90・重量投で日本記録を打ち立てた
※写真は別大会のもの(表彰中央が高野さん)



のではなく、歩型を気遣いながら歩くので、妙味があるでしょう」と言う。

本格的に競歩に取り組み始めたのは、50代半ば。千葉県では競歩が盛んだが、種をまいたのは51(昭和26)年にインドのニューデリーで行われた第1回アジア大会の10000mWで2位、50kmWで3位となった佐藤武男さんで、競歩の妙味を植えた人といわれる。

松本さんは国内の大会だけでなく、海外へも飛んでいる。アジア・マスターズには5回出場したが、思い出に残るのは2002年に中国・大連での第12回大会もその一つ。大会は9月15日の夜に行われ、16カ国から1600人が参加し、3万2千人の観客がスタンドを埋めた。盛大な開会式で入場行進した選手たちは「感動した」と振り返る。

松本さんはこの大会のW60・5000mWで32分43秒2の大会新を出した。また、14年の72歳のときに出場した日本の岩手・北上であった第35回全日本と第18回アジアを兼ねたマスターズ大会のW70・5000mWで、先出の31分37秒13の日本記録を出して優勝したことも「思い出に残るかな」と話す。だが、「競歩に出る人が少なかったのでは、勝たせてもらえただけ」と控えめな言葉も付け加えた。

世界マスターズ大会では09年にフィンランド・ラハティでのW65クラスの競歩に出場。5000mWと20kmWで3位となり、10kmWで4位と2つのメダルに結びつけた。このほか、69歳で参加した11年のアメリカ・サクラメントであった第19回大会も「楽しかった」と振り返った。W65・5000mで4位だったが、10kmWに2位となって表彰台へ。

松本さんは懐かしい大会を思い出しながら「まだまだ元気。W80クラスでこれからも頑張ります!」。

高野孝雄さん(91歳・栃木)が魅せたM90・重量投8m55

M90クラスの重量投で高野孝雄さんが魅せた。雨天で競技が途中で中止になる場面もあったが、1投目に5.45kgの重量球を8m55の地点まで飛ばした。「よくやった、と自分自身を褒めたい気分でした」と高野さん。

高野さんが投げた8m55は、今までの日本記録である6m32を2m23も伸ばす新記録だ。この日の高野さんは「上腕筋の筋肉を痛めていたので、うまく投げられるかな」と、決して調子がよかった訳ではなかったが、「投げる以上は新しい記録が出るように頑張ろう」という気持ちで挑んだようだ。

さらに、高野さんはM90・ハンマー投でも20m95の日本記録を樹立した。

また、当日の天候不順が原因で帰宅するまでに時間のかかったエピソードも。「競技途中で雨が激しくなって、中断が1時間30分ほどあったりして、競技が終わったのが日暮れごろ。それから電車を乗り継いで栃木県内の自宅まで帰るのに時間がかかり、家に着いたのは夜の10時を過ぎていた」と苦しい。

高野さんは若い頃からあらゆるスポーツと取り組み、高校では体操を主体に陸上、相撲ほか幅広くやった。宇都宮市の大学では陸上のハンマー投で北関東大会で優勝したことも。

大学卒業後は教職の道に進み、小学校教諭を勤め、定年までに校長、教育長などの要職に就いている。マスターズ陸上をやるようになってから、大会に出たとしても教務多忙で「遠方の大会

には出られなかった」と残念がる。

近年では89歳で出場した19年に群馬県で行われた第40回記念国際・全日本マスターズ大会で投てき3種目すべてに入賞を果たした。M85クラスでは不利な年齢だったが、砲丸投6m72で5位、円盤投17m09で3位、ハンマー投23m02で4位の成績。いずれの種目も出場者中、高野さんが最年長だった。

重量投は全日本マスターズでは実施されておらず、同年度の千葉マスターズの重量投で、10m33を投げた高野さんの記録がランク1位となった。

この重量投だけの大会が始まったのは06年。同大会も11年の第6回大会以降は実施されていないようだが、高野さんはこの大会に傘寿(80歳)で出場した。M80・ハンマー投に臨んだ高野さんは28m51のスローイングで、11m82を投げた重量投と共に優勝を果たした。

11年といえば高野さんがサクラメント(アメリカ)の第19回世界マスターズ大会へ出向いた年だ。M80・砲丸投9m38、重量投11m05で各6位、円盤投22m15、ハンマー投28m72の各7位、重量五種3172点で4位と、トップ8以内を出場全5種目で成し遂げた。「思い出深い大会でした」と感慨深げ。

世界、アジア各大会でそれぞれ得たメダルや賞状は10本の指には収まりきらない。「日々、重量投」が生きがいの高野さんは、毎日の練習を欠かさない。定年までエリートの道を歩んできた高野さんには、これからも重量投でエリートの道を歩んでほしい。